

松任谷正隆の

# イ業のひとりごと

08

## VOL.08 家を離れる

同居していた祖父が亡くなったのは、確か僕が小学校高学年の頃と記憶している。

88歳で老衰ということだった。

弱ってきたかな、と思っていたら入院することになり、それからは早かった。

僕の初めて経験する葬式は、なんだか変な感じだった。

従兄弟がテレビタレントであり、画家ということもあって、

黒い服を着た人たちが彼女に群がりサイン会になった。

子供心に不謹慎だ、と思った。

葬式くらいは故人を思いながら慎ましやかにするべきだろう。

僕はそんなことを思う子供だった。



葬式が終わると、遠い親戚だと名乗る紳士が、祖父の子供達、

つまり僕の親父を含む兄弟達を集めて毎晩のように協議を始めた。

遺産相続の話だった。



祖父は、自分を世話をしてくれた代わりにこの土地を親父に譲る、

と毎日のように言っていたので、当然そうなるものだと思っていたのだが、

遺言という正式な書類を残さなかつたらしい。

そのため、祖父からそれぞれ土地や家を与えられていたにもかかわらず、

兄弟達は僕たちが住むこの土地に対しても、自分たちの権利を主張し始めたのだ。

最低だな、どこまで浅ましい奴らなんだ、と子供心に思った。

こいつらが死ぬまで口なんか聞くものか、と思い、実際に僕はそうした。

死んでも、もちろん葬式には行かなかった。

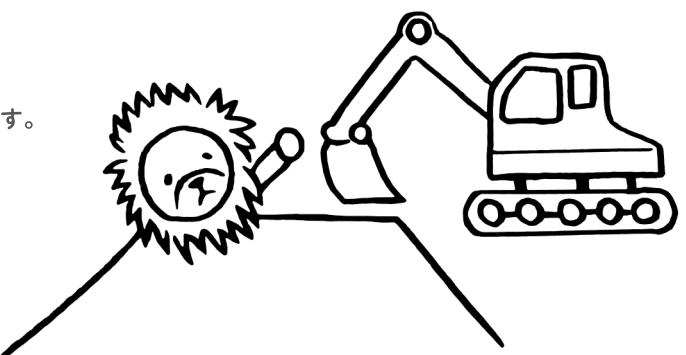
結局、話し合いで腹違いの親父の兄が3分の1、親父の実の弟の一人が3分の1、もうひとりの弟の方はどうやら遠慮をしたようだった。つまり親父は自分の家を3分の2失ったということになる。結局、その分は親父がお金を支払うことで解決をしたらしい。どう考えても不条理だ。不条理という言葉はこういうことのためにあるのだ、と思った。お金で解決をしたのだからそのまま住み続けても良かったはずだ。

実際、それから数年はその家で暮らしたが、親父もどうも腹の收まりが良くなかったらしく、越したいと言い出した。越すにあたっては、母方の祖母が持っていた土地が候補に挙がった。バスで10分程度。祖母の家からは歩いて5分程度。マザコンの母親にとっては実に好都合だ。それでも親父は育った土地に愛着もあるらしく、不動産屋には売らず、区に売って公園にした。今でも環八沿いの佃公園として残っている。

新しい家を建てる作業と古い家を取り壊す作業はどんなタイムテーブルで進められたのかは覚えていない。別のところに仮住まいをした覚えはないから、出来てから壊したのだろう。

見に行ったとき、取り壊されて黒い土だけが盛り上がった  
土地の上に、僕のピアノの上に置いてあった  
ライオンのぬいぐるみがボツンと落ちていたことを思い出す。

僕の音楽を密かに見守ってくれていた  
ぬいぐるみだったからショックだった。  
なぜ、そんなところに落ちていたのだろう。



泥にまみれたそれを複雑な思いで持ち帰ったのを覚えている。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy